

Juichi WAKISAKA Race Report

2015 AUTOBACS SUPER GT Round 4 – FUJI GT 300KM RACE -

◆◆ 厳しい戦いを凌ぎ、4戦連続入賞を果たす ◆◆

No. 19 WedsSport ADVAN RC F		
Drivers	Qualifying	Final
脇阪 寿一 / 関口 雄飛	15位	10位



■大会概要

開催日：2015年8月8日-2015年8月9日

サーキット：富士スピードウェイ（静岡県御殿場市、コース全長：4.563km）

レース距離：66周（301.158km）

入場者数：予選日20,400名、決勝日36,400名、合計56,800名

8月8-9日、静岡・富士スピードウェイにおいて2015年 SUPER GT 第4戦「FUJI GT 300km RACE」が行われた。脇阪寿一、そしてパートナーの関口雄飛選手がともにドライブする No.19 WedsSport ADVAN RC F は、クルマのバランスが思うように取れずに予選15番手からの厳しいスタートを切ったが、決勝ではクルマのコンディションが改善され、攻めの走りに徹した結果、10位でチェッカー。これにより、開幕戦から4戦連続でポイント獲得を果たすことになった。

■8月8日(土)

08:50-10:35 公式練習（10:45-11:00 サーキットサファリ）

14:35-14:50 ノックアウト予選（Q1）

15:20-15:32 ノックアウト予選（Q2）

【公式練習】15番手 / 1'30.767

海外戦のタイからおよそ1ヶ月半。富士での戦いを前にガレージに戻ってきた車両をメンテナンスし、まずは7月末に宮城・スポーツランドSUGOで行われたGTA主催の公式テストに参加、その後、三重・鈴鹿サーキットにおいてタイヤメーカー主催のテストに取り組んだ No.19 WedsSport ADVAN RC F。脇阪によると、その間、クルマのフィーリングが悪く、ブレーキング時のリアロックやフロントのターンイン時ではオーバーステアを発症。ナーバスな状況になっているクルマの動きをいかに改善するかが大きな課題となっていた。

予選日の朝に行われた公式練習では、富士での空力パッケージである「ローダウンフォース仕様」によって、いくぶんフィーリングが改善されるのではと期待して走行を開始。だが残念ながらその兆しはなく、依然としてスッキリしない症状が続くこととなった。

なおセッションを前に、サーキットでは5月に逝去された往年の名ドライバー松本恵二氏、インパルの金子豊氏の追悼の意を表して黙祷が行われた。脇阪自身が「レーシングドライバー脇阪寿一を作ったのは松本恵二師匠」と語るように、脇阪にとっては追悼レースにもなる今大会、松本氏と同じカラーリングのヘルメットを着用し出走している。



【ノックアウト予選（Q1）】15番手 / 1'30.024

午前の公式練習を経て、サーキット上空は薄い灰色の雲が広がりはじめ、日差しが和らぐ。午後からの予選を前に気温27度、路面温度34度と思った以上に厳しい暑さとはならなかった。そんな中、午後2時43分からGT500のQ1がスタート。Q1のアタックを担当したのは、

関口選手。朝の公式練習後、改善の兆候を見せなかったクルマに対し、チームでは大掛かりなセッティング変更を敢行。長らく厳しい戦いを強いられているだけに、なんとしても突破口を見つけようという思いから決断したという。

その思いに応えるべく、関口選手も懸命の攻撃を見せたが、1分30秒024とタイムを伸ばすことができず15番手でQ2進出を逃し予選を終了。厳しい現実を突きつけられることになった。

「本来ならば予選を前にやること（大掛かりなセッティング変更）じゃないのは承知の上でした。ただ、今後の課題に向けて今やれることをやろうという思いで、全てのセッションでつねにトライすることを決めました」と予選を振り返った脇阪。ファンの皆さんに対して申し訳ない気持ちもあつたとした上で、「今の厳しい状況は、すべて僕らが成長していくためだと信じ、ステップアップをしていかなければなりません。攻撃を行った関口選手もこれまでの症状が幾分緩和されたというコメントをしていたので、明日の決勝では良くなることを信じています」と今大会に限らず、シーズン後半に向けての躍進を見据え、真っ向から問題に取り組む強い姿勢を強調した。



■ 8月9日(日)

09:35-10:05 フリー走行

15:00- 決勝（66周）

【フリー走行】 15番手 / 1'32.459

決勝日を迎えた富士スピードウェイ。昨日とは打って変わって澄んだ青空が一面に広がり、併せて気温も30度を超える真夏日となった。にも関わらず、真夏の一戦を見ようとサーキットには3万6千人を超えるファンが来場した。

午前9時35分から始まったフリー走行。前日の予選直前まで大いに悩み、苦しみながらも選択したセット変更が弾みとなり、予選攻撃では問題視していた部分が幾分改善されたことが明らかとなっていたことから、まず関口選手がステアリングを握り、フィーリングをチェック。その後、前日の予選で出走の機会がなかった脇阪に交替した。確実な進歩に手応えもある中、このセッションでは最終確認を行った上で、決勝に向けてのクルマ作りに取り組むこととなった。



【決勝】 10位 / 1ポイント獲得（シリーズポイント：8ポイント、シリーズランキング：14位）

気温 31 度、路面温度 45 度とまさに真夏のバトルに相応しいコンディションとなった午後の決勝レース。激走を前にギラギラとした強い日差しがグリッド上に整列した全車へと照りつけた。No.19 WedsSport ADVAN RC F のスタートドライバーは、関口選手が担当。素晴らしいスタートからオープニングラップを終えると、その後タイヤのマネージメントも視野に入れて周回を重ねていく。レースは、前日のセッションに比べて大きなコンディション変化にうまく対処できないチームが戦いの折り返しを前に早くもペースダウン。それを尻目に関口選手は着実にポジションアップを成功させ、かつタイヤセーブも意識しながらの走行を続けた。

ルーティンのピットインは35周を終えてから。ライバルよりもタイミングを遅らせて作業に取り掛かった。迅速なピットワークを終えて、コースへと送り出された脇阪。これまでチームと一緒に取り組んできた改善の成果を感じつつ、また、自身の中でも芽生えた良い変化を味わいつつ、実りある走りを重ねていく。終盤に入ると、コース上はデブリが散乱、時に接触も見られるなど慌ただしく荒れた展開になったが、その中で冷静沈着にクルマをコントロールし戦い続けた脇阪は10位でチェッカー。これで No.19 WedsSport ADVAN RC F は開幕戦から4戦連続での入賞、ポイント獲得を達成。内容こそ、厳しいものではあったが、第5戦鈴鹿1000kmからの後半戦に向けて新たな躍進を遂げたといえる。



長く暑い戦いを終え、「今回は変化をもって挑んだレースでした」と脇阪。前回第3戦タイでの結果を踏まえ、この富士戦ではなんとしても進化を図りたい一心で戦ってきたのだという。まさに背水の陣だった。「TV番組（ジャンクスports）への出演を機に、多くの知人やドライバー仲間から声をかけてもらい、アドバイスを頂きました。カートトレーニングをしたり、レースでのドライビングポジションを見直したり…。すべての事が新しく、今までにない感覚をもってこの富士のレースができたように思います」と自身の中で生まれた変化を素直に喜び、協力してくれた方々への感謝の気持ちを口にした。

「アドバイスの成果もあってか、久しぶりにレースをした印象があります。次のレースがとても楽しみです。まだまだな部分もありますが、楽にクルマを操作できるようになってきた事を感じることができました。ここ最近忘れていた感覚でしたね。たくさんの周りの人に生かされている自分を再確認することもできましたし、チームのみんなと戦い抜き、掴みとった大きなポイントだと思っています。次戦鈴鹿は攻めの走りができると思っています」。

第4戦鈴鹿は3週間後。続く真夏の戦いで覚醒した脇阪の新たな戦いはすでに始まっている。

次戦は、8月29日(土)・30(日)に鈴鹿サーキット（三重県鈴鹿市）で開催される。

[Photo Gallery]



